

## プレガルディエンが歌う《冬の旅》

2002年7月19日(金)浜離宮朝日ホール

石塚 潤一

シューベルトの創作を代表する作品である歌曲集「冬の旅」には、表面の単調でくすんだ色彩の奥に、目を見張るような多彩さが隠されている。特に、単純かつ緊密な書法の中に微細な色彩が織り込まれたピアノパートは素晴らしく、複数の作曲家がこの曲の編曲に手を染めていることも頷ける。そうした編曲のうち、最も野心的なものとして、ドイツの現代音楽作曲家であり、指揮者としても活躍するハンス・ツェンダーによる編曲が挙げられよう。この編曲では、ウィンドマシーンの導入による直裁的な表現や、シアターピース的な仕掛けが、聴き手に旅人の心情を疑似体験させる。不協和音や特殊奏法の導入、伴奏形の改変も頻繁で、「冬の旅」が隠し持つ多彩さを、グロテスクな程に拡大して聴衆へと突きつけることも忘れられてはいない。

七月十九日に、浜離宮朝日ホールで行われた「冬の旅」(オリジナル版)の演奏は、前日にツェンダー版を歌ったばかりのプレガルディエンが、その経験を踏まえて、いかなる演奏表現を聴かせるのかが注目された。

第一曲の「おやすみ」前奏より、伴奏のゲースは大きくテンポを揺らして、この日の演奏の方向性を提示する。プレガルディエンの歌唱は、室内オーケストラを相手にしていた前日より、さらに振幅が激しいもので、広範なダイナミクスを感情表現の起伏へと結び付け、各曲の性格を際立たせていた。フォルテでは声も裏返らんばかりに激し、ピアノシモでは聴衆の注意を残らず引きこむこと意図しているかのように囁く。ゲースは、テンポを揺らすと同時に、ペダルを多用した多彩な音色を紡ぎ、独唱者の表現へと寄り添っていく。一見、小細工が過ぎるようにも思える伴奏が、非常な説得力を獲得していたのは、お互いが他方の演奏の細かなニュアンスの変化へ即座に対応出来るから。そうした美点は、「春の夢」冒頭における、ため息さえ漏れるような雰囲気の変化などに見事に結実していた。さらに驚くべきは、「最後の希望」で聴かれる、ヴェーベルンの音楽を思わず叙情の表現である。点描的に薄く弾かれるピアノは、もはや独唱者を支えることは無く、決して交わることがない平行線のような孤独が演出される。しかし、そうした表現もまた、二人が、お互いの奏でる音楽に深く耳を傾け、濃密なるコラボレーションを繰り広げた結果なのだ。

この日のプレガルディエンは、ツェンダー版での演奏とは対照的に、ゲースと二人だけで音楽を作れるが故の自由を、余すところなく活用し、より精妙な表現の高みへと上っていった。オリジナル版の「冬の旅」に結晶した切り詰められた音風景から、豊かな色彩を引き出したのは、技術の粋を集めた編曲ではなく、親密さの中に協働する演奏者の力であった。